

# 京都大学プラヘラス宣言

～減らしながら考え、考えて減らす。～

エコ〜るど京大 2019年6月27日

京大生が「プラスチックを減らすこと」について考えてみました。

なぜプラスチックを減らすのでしょうか？

素材としての利用が始まってから1世紀足らず。

その軽量・高可塑性・安価といった優れた性質を活かし、

いまや私たちの暮らしすべてを形作っているといっても過言ではないプラスチック。

しかし、その原料は主に枯渇性資源である石油であり、

世界中で日常的に大量生産・大量消費され、大量廃棄されているのは疑いようのない事実です。

どのプラスチックを減らすのでしょうか？

レジ袋などのシングルユースプラスチックは、以前より削減が進められてきました。

同時に、流通量が圧倒的なペットボトルへの対策も重視されています。

最近では、海洋プラスチックやマイクロプラスチックの問題がムーブメントを加速させています。

しかし、これらはプラスチック利用のほんの一部であり、

大部分は削減に向けた対象として広く認知されていないのも事実です。

どのようにしてプラスチックを減らすのでしょうか？

国や地方自治体、さらには企業や団体により、

3Rをはじめリニューアブルなバイオ系の素材開発や高機能化などの取り組みが広がっています。

また、個人による努力や工夫を行う人も増えてきました。

しかし、プラスチックに対する意識や依存度がそれぞれに異なるため、

社会全体としての足なみがそろわないことも事実です。

これまでのプラスチックを減らす取り組みに足りなかったのは、

プラスチックの複雑性と多面性に対する理解の広がりや深まりではないでしょうか？

認識を広げ、対話を重ねることで、プラスチックとの付き合い方を考えることは、

持続可能な社会の実現に向けて避けて通れません。

では、誰が、いつ、どこで、プラスチックを減らすのでしょうか？

そうです。京大生が、いま、ここで、動き始めます。

プラスチック問題の本質を捉え直し、徹底的に考え、議論し、行動してゆくことを、宣言します。

私たちは、この宣言を、プラスチックを減らす本質的な動きの源流となる希望を込め、

ソクラテスやプラトンやアリストテレスらを生んだ「学芸の源流」たる古代ギリシャの呼び名「ヘラス(Hellas)」をなぞらせ、

「京都大学プラヘラス宣言」と名付けます。

## ● 背景

プラスチックが引き起こす諸問題については、資源の有限性、様々な場面における温室効果ガス排出、ごみ処理の行き詰まりなどの視点から、従来より議論されてきた。加えて特に最近、マイクロプラスチック化を含め、海洋・生態系に与える影響が大きく取り上げられ、国内外で多くの議論やムーブメントを生み出している。

一方、プラスチックは軽量・高可塑性・安価と優れた要素が多く、現代社会と切っても切り離せない物質であり、私たちの生活の隅々まで浸透している。しかし、持続可能な社会と環境を実現するためには、枯渇性の化石資源を大量に使用しているという現代社会の根源的な課題を避けて通ることはできず、いずれ枯渇性の化石資源を原料とするプラスチックから卒業しなければならないことは明白である。非枯渇性（バイオ）プラスチックが技術・経済・資源的に十分とは言えない現在、すぐさま既存のプラスチックをすべて置き換えることは不可能であり、まずは必要不可欠（エッセンシャル）なプラスチックやライフサイクル等の観点で便益が大きいプラスチック（例えば、軽量で輸送時の化石燃料の大幅削減につながっているなど）以外を対象として、プラスチック利用の大幅な削減を目指すべきである。

日本政府はプラスチック資源循環戦略として、3R+Renewable（再生可能資源利用）を提唱し、具体的な目標値を掲げて取り組みをスタートした。こうした概念整理や方向性は、多くの議論や思考の積み重ねであり、先述の現状認識とも合致したものである。今後は、その実現に向けて、全力で試行錯誤する必要がある。

ところが、ここまでプラスチックが社会問題化しているにも関わらず、残念ながら私たちの日々の暮らしにはほとんど変化が見られない。国内外の諸大学において取り組みが活発になっている一方、本学においてはほとんど何も行われておらず、非常に立ち遅れている状況にある。なぜなのか？ ここには、社会的な課題と私たちの意識・行動に関わる課題の両方が横たわっていると考えられる。多くの人は、そもそも身の回りに存在するプラスチック製品の全体像を把握できておらず、それらの便益・意義も明示的に認知していない。そのため、レジ袋やストローなどごく一部の製品を対象としている取り組みしか広く認知されておらず、社会全体としてプラスチック問題の本質に迫ることが難しくなっている。

## ● 目的及び概要

プラスチックが私たちの暮らしの隅々まで浸透し、簡単には減らせない状況にあることを改めて認識した上で、「なぜ？」を建設的かつ実践的に検証し、取り組みの方向性を学内や社会に提案することを目指し、次のアクションを展開する。

### 1) プラカウントキャンペーン「#かばんの中のプラ」

私たちの暮らしが、いかに多くのプラスチック製品に支えられているかを認識するために、SNS キャンペーンを行う。学内の構成員を中心に、各自のかばんの中に入っている全てのプラスチック製品を並べて、すべて数え上げる「プラカウント」を行い、写真とともに「#かばんの中のプラ」「#Plastics in My Bag」として投稿してもらう。まずはエコ〜るど京大のアカウントで毎日3人以上のアップを目指し、海外の連携大学等にも広げ、今年度中に千人以上の投稿を得ることを目指す。なお、後述する京大式プラチャート「プライド」を用いて、各々がプラスチック製品を4分類することで、2)による検証につながる基礎データベースを得ることができる。

### 2) 京大式プラチャート「プライド」の提案と検証

身の回りにあふれているプラスチック製品を、「いる・いない」「避けられる・避けられない」という2つの観点を用いることで、4種類に分類する京大式プラチャート「プライド」を提案し、その有効性を検証する。これを用いて様々なプラスチック製品に対する自身の意識・価値観を可視化することで、プラスチック問題の本質を考えるきっかけとしてもらう。同時に、多くの人の結果をデータベース化し、プラス

チック製品との持続可能な付き合い方を可能にするために、個人の意識・行動の変容と規制・企業努力などをプラスチック製品に適用する方策の検討につなげる。

3) プラヘラスプロジェクト ~学生と教職員でここから始めます~

1) や 2) の結果を待たずして始めることのできる次の対策は、すぐさま取り組む。

- ・フロー解析・・・学内での研究・教育・社会貢献活動に伴い、多種多様なプラスチック製品が使用され、プラスチックごみが大量に発生していることは判明している。しかし、発生源に関する調査はあまりなされておらず、また、廃棄の段階ではごみ排出量の把握が部局ごとに行われており分別・測定基準が統一されていないため、フローの把握は不十分である。そこで、生協や周辺コンビニなどの POS データを用いた発生源調査、居室等におけるストック量実態調査、アンケートによる意識調査、分別の徹底・基準の統一によるマテリアルレベルでの定量実験等を行い、フロー・ストックの解析を試みる。
- ・実践・・・プラスチック製品の中で「プライド」においても比較的立ち位置が明確なレジ袋やストロー、おしぼり、使い捨てスプーン・フォーク、傘袋（以下、シングルユースプラスチック）とペットボトルをターゲットとする。シングルユースプラスチックについては、構成員への啓発を行うと同時に、学内や周辺店舗、京都市等とも連携を図り、大幅削減を目指す。ペットボトルについては、アイデアソンなどの形で京大生の独創的なアイデアを引き出し、削減のための議論と実証を行い、大幅削減を目指す。

● 京大式プラチャート「プライド」とは？

身の回りにはあふれているプラスチック製品を、「いる・いない」「避けられる・避けられない」という2つの観点を用いることで、4種類に分類する。「プライド」上で分類することを通して、自身のプラスチック製品に対する意識・価値観を可視化することで、各々がプラスチック問題の本質を考えるきっかけとなる。

プラスチック製品の使用を削減し持続可能な在り方を実現するためには、4種類の分類に応じた適切なアクションを取ることが必要である。具体的には、「いらなくて避けられるプラ」（右上）に対しては、積極的に削減に取り組むべきである。「いるが避けられるプラ」（左上）は個人の意識や行動の変容を促して右に移動させ（緑）、「いらなくて避けられないプラ」（右下）は規制や企業努力により上に移動させ（黄）、それぞれ「いらなくて避けられるプラ」（右上）に近づけることができる。「いるし避けられないプラ」（左下）は、本当に必要なエッセンシャルユースを除いて、上記2つのアクションを取ることができる。「プライド」を用いて多くの人の意識・価値観をデータベース化して、右向きの個人の意識・行動改善と上向きの規制・企業努力を、社会全体として適切に促すことで、プラスチック製品との持続可能な付き合い方が可能になる。

